

お正信偈拝読 その六「如来、世に興出したまふゆゑは」

ご讃題 (Ref:行巻「正信偈」註釈版聖典 P203)

如来、世に興出したまふゆゑは、ただ弥陀の本願海を説かんとなり。  
五濁悪時の群生海、如来如実の言を信ずべし。

一、唯聴弥陀本願海

浄土真宗で一年で最も大切なご法座は報恩講です。

今日でも五座の報恩講が満堂になるお寺様があります。その訳は、お参りの皆さんお一人お一人が例外なくお隣ご近所に声を掛け誘い合してお参りになるからです。

報恩講は、親鸞聖人のご恩に報いるお聴聞のご法座であります。

生きて行く上で何が大切か、それを明らかにして下さったお方が親鸞聖人であります。

人は何のために生まれ、生き、どっちを向いて生きていくべきか、実は、それは既にお正信偈に明らかにされています。

ではその御文はどこか、ご讃題のご文がそれです。

ご文は「如来が世に現れ給うたそのわけは、ただ一つ阿弥陀如来の御本願のお謂れを説かんとしたためであった。」という意味であります。

最初の「如来」とは、お釈迦様(釈尊)のことです。

数あるお釈迦様のお説き下さった法門の中でも、阿弥陀如来の御本願のみ教えが煩惱具足の私たちを例外なく救い取ろうというみ教えですから、そのおいわれを明らかにしたいというのが釈尊がこの娑婆世界に現れて下さった本当の目的だったというのであります。

そうすると、この私はお釈迦様のお説き下さる阿弥陀如来のご本願のみ教えを聴聞し、お念仏を申す身に育てて戴くこと一つでお救いに

与るのですから「唯説弥陀本願海」の「説」という字をお聴聞の「聴」に置き換えて「唯聴弥陀本願海」が如来様に願われた私のつとめであることが判ります。

阿弥陀如来のご本願のみ教えによって明かにされた私たち凡夫についての親鸞聖人のお味わいをお聞かせに与ってみましょう。

親鸞聖人は、私たち凡夫は、およそ三つの特徴があるとご覧になっていらっしやいます。

例外なく誰にも代って貰うことのできない独りの人生を歩んでいること、

煩惱に振り回されて勝手気ままな都合で生きていること。それ故、都合が悪くなるとそれまで頼りにしてきた自分自身の命さえも捨てかねない身であること。

人は皆「生老病死」の道を歩んでおり、その現実から免れることはできません。

一口に「生老病死」と言っても、健康と若さの真ただ中にいる人たちにとっては実感がわからないことでしょう。

これを端的に言えば、誕生以来、私を見守ってくれた祖父母、父母等々大事な人をみんな失って行かねばならないというのが私たちの逃れる術なき世の現実だといいかえることができます。

その意味で生老病死の現実は苦悩そのものです。

その苦悩から私たちは一体どのようにすれば逃れることができるのでしょうか。

それが「阿弥陀如来の御本願のおいわれをお聞かせ戴くことをおいてはない」というのがお釈迦様が明らかにされ、親鸞聖人がお示し下さった「勅命の他に領解なし」のみ教えのお心だったのです。

浄土三部経の御経様の最後の御文にお尋ねしてみますと

「聞仏所説靡不歡喜」(仏の所説を聞きたてまつりて、歡喜せざるは

なし(大経)、

「聞仏所説皆大歡喜」(仏の所説を聞いてみな大きに歡喜し)(觀經)、  
「聞仏所説歡喜信受」(仏の所説を聞いて、歡喜し、信受して)(小  
經)、とあるように

どの御經様も、お釈迦様の説法の場に居合わせたお弟子様達は、一人  
の例外なくお釈迦如来のお説き下さるみ教えをお聞かせに与り、心身  
ともに慶びに満たされていたことを知ることができます。

共々に、阿弥陀様のご本願のみ教えをしっかりと聴聞させて戴きま  
しょう。

### (あとがき)

これは、去る七月十一日、滋賀組第十一期連続研修会第七回研修で  
講師の三宮亨信住職から頂戴したご法話の趣旨であります。

人は何のために生まれ、生き、どっちを向いて生きていくべきか、  
実は、それは既にお正信偈に明らかにされています。

「ではその御文はどこか」と言ったとき、答えは必ずしも一つではな  
いかもしれません。

三宮ご住職は、「実は、今日のこのお話は私の師匠から承ったその  
ままをお伝えしたのです。」と結ばれました。

いかにもご本山の住職過程でご法話の講師を御担当なさっている三  
宮ご住職らしい着想でありお話でありました。

研修のあとで三宮ご住職に「お師匠様はどなたですか」とお尋ねし  
ましたところ「<sup>よしやましようかい</sup>靈山勝海和上です」とお聞かせに与りました。

まことに「<sup>ゆいちようみだほんがんかい</sup>唯聴弥陀本願海(お釈迦様がお説き下さった如来様のご  
本願のおいわれを如實にお聞かせに与る)」というのは布教使(念仏  
者)として自ら如来様の仰せに頭を垂れていらっしゃる三宮様でなけ

れば、更には、そのお師匠の靈山和上でなければ承ることのできない  
深いお慶びに根ざしていることかと<sup>うかが</sup>窺えた次第であります。

このことについて、私にも丁度同じように承った忘れることのでき  
ない出来事を思い起こさないではおれません。

一念多念証文の親鸞聖人の御言葉「<sup>もんごみょうごう</sup>聞其名号<sup>ごもん</sup>というは、本願の名号  
をきくとのたまへるなり」とおっしゃる御文の中に、如来様の<sup>じきせつ</sup>直説に  
頭を垂れて聞き入っていらっしゃる親鸞聖人のお姿が読み取れるとい  
う体験を頂戴しました。

この御文はずっと以前から親しませて戴いておりましたのに、殿試  
で出抛を誤って記載するという機縁によってはじめてお聞かせに与  
った真実でありました。

同じご文を目の当たりにしながらも、いつも上っ面を通り過ぎてい  
た私自身のお恥ずかしい姿に気付かせて戴いたことでありました。

殿試から十数日を経て「きくとのたまへるなり。・・・きくといふ  
は信心をあらはず<sup>み</sup>御のりなり。」のご文には、宗祖親鸞聖人が阿弥陀  
如来の直説に聞き入っていらっしゃるお姿が目<sup>み</sup>に浮かぶのですがと、  
梯 實圓和上におたずねしましたところ、

和上様は、にこやかにただ一言「そうです」とお応え戴いたのです。  
それはなんという幸せなひと時だったことでしょう。

まことに、「(阿弥陀如来の勅命を)聞くと<sup>み</sup>のたまへるなり」のご文  
には、浄土真宗の宗教的<sup>み</sup>真実が、如来様のお手許から私の上<sup>み</sup>にやって  
きたみちゆきが潜んでいたことでありました。合掌(玄宥記)

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)	
〒五二〇 〇五〇 一 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 〇一六六	
<a href="mailto:mhkatata@pluto.dti.ne.jp">✉-📧 mhkatata@pluto.dti.ne.jp</a> 使務 堅田玄宥	